

子育て世代のワークスタイル事例集

総務部人事課

➤ はじめに

人事課では、石川県特定事業主行動計画を策定し、職員の仕事と育児の両立支援や女性活躍の促進など、すべての職員が健康で能力を発揮できる職場づくりに向けて取り組んでいます。

仕事と育児の両立を目指す中では、「育児をしながら部下を持つなんて自信がない…」、「男性だけど育休取得は難しいのかな…」等の悩みを抱えている方も多いのではないかと思います。

こうした中、様々な分野で活躍している先輩職員の子育て中の仕事への取り組み方や、困難に直面した際の乗り越え方などの実体験を紹介する「子育て世代のワークスタイル事例集」を作成しました。

職員の皆様におかれましては、この事例集を活用いただき、仕事と育児の両立に向けた工夫や、将来の自らのキャリア形成に参考となる要素を見つけていただければ幸いです。

➤ 目 次

- 1 森田 典子 生活環境部長
- 2 佃 早希子 南加賀保健福祉センター健康推進専門員
- 3 松林 憲吾 観光企画課専門員

※所属・職は、記載当時のものです。

1 森田 典子 生活環境部長



一 略 歴 一

H4.4 総務部総務課

↑育休①、復帰

H8.4 企画開発部県民文化局県民交流課

↑育休②

H9.4 総務部総務課

↑復帰

H10.4 厚生部長寿社会課

H12.4 健康福祉部医療対策課

↑育休③、復帰

H16.4 健康福祉部医療対策課医療企画専門員

H17.4 健康福祉部医療対策課専門員

H20.4 総務部総務課専門員

H22.4 総務部総務課主幹（文教 GL）

H23.4 総務部人事課長補佐（人材育成 GL）

H25.4 健康福祉部薬事衛生課長補佐

H26.4 総務部人事課福利厚生室長

H27.4 健康福祉部少子化対策監子ども政策課長

H29.4 健康福祉部少子化対策監子育て支援課長

H30.4 健康福祉部少子化対策監

R3.4 県民文化スポーツ部次長

R5.4 生活環境部長

家族みんなで協力して乗り越えた 子育て期。仕事も育児も全力！

私には、現在社会人の長男、長女、大学生の次男の3人の子供がいます。私の育児は、もうずいぶん前のことなので、現在に通用するのかいささか不安ですが、少しでもどなたかの参考になれば幸いです。

我が家の長男と次男は8歳離れていますので、長男が誕生してから、次男が小学校を卒業するまでも、20年位かかりました。県庁生活の大部分が子育て中でした。毎日が仕事と子育て生活で、忙しすぎて、あまり覚えていないことも多いです。子供それぞれに1年ずつ育休を取得しましたが、初めて育休を取得したのは、平成6年。まだ、周囲に「育休」をとったという人を聞いたことがない時代で、私は、育休をとると係内の人に迷惑がかかるのではないかと、取得を迷っていました。その時、夫は、せっかく制度があるのだから、後の人のためにも取得すべき、と背中を押してくれました。

私は他県出身で、夫の両親は能登在住でしたが、夫は、子供のお迎え、病気の時の看病などしてくれる、今でいう「育メン」で、二人で協力して育児をしてこられたと思います。（これが大事）

仕事と育児と言って思い起こされるのは、なんといっても、「常にお迎えの時間を気にして、時間に追われていた」ということでしょうか。保育所は夜7時まで預かってもらえましたから、ギリギリ6時半には県庁を出たい、そのために、全力で仕事をこなす、そのような感じでした。仕事は、集中して、効率よく。優先順位をつけ、段取りを考える。自分でわからないことは、すぐ、上司、同僚等に相談する、決して一人で抱えない、というスタンスでした。（周りから見たら、必死の形相だったのではないかと少し反省しています。）

また、困ったことといえば、やはり、「子供の急な病気等に対応するか？」問題。まず、休めるときは自分が休む、だめなら夫、それもだめなら夫の両親、それもだめなら病児保育という4重のセーフティーネットでなんとか乗り切りました。子供が長く休まなければならない病気の場合は、夫の両親をお願いして、能登の家で子供を長期

預かってもらうことが時々（かなり？）ありました。

子育てで身に付いたスキルは仕事にもプラスに

忙しい子育ての毎日の中で自然と身についたのが、段取り、事前の準備、周囲とのコミュニケーションだったのではないかと感じています。これは、職場で仕事を効率良く行うためにも必要なスキルなのではないかと思います。

育児は、仕事にマイナスではなく、プラスになる面が大きいと思います。なかなか思うとおりにならない子供を育てるという経験（特に忍耐力）や、周囲の方から受ける協力への感謝、人とのネットワーク構築など、その後のキャリア形成の上でも、人として視野を広げる意味でも、大変有意義だと思えます。育休後は、一回り大きくなって、復帰することでしょう。

管理職のみなさまにおかれましては、男女を問わず、必死に育児・仕事に頑張る職員をあたたく見守ってあげてください。

2 佃 早希子 南加賀保健福祉センター健康推進専門員



— 略 歴 —

H16.5 奥能登総合事務所（能登北部保健福祉センター）

H19.4 リハビリテーションセンター

H22.4 中能登総合事務所（能登中部保健福祉センター）

↑ 育休①、復帰

育休②、復帰

H27.4 南加賀保健福祉センター

↑ 育休③、復帰

R3.4 南加賀保健福祉センター健康推進専門員

**仕事と育児の両立は毎日が綱渡り。
上司からの理解ある励ましに救われた。**

現在の主な業務は、感染症や結核対策です。感染症が発生した際に、感染法に基づき疫学調査や接触者健診などを実施しています。また様々な電話相談に応じたり、家庭訪問をすることもあります。

新型コロナウイルス感染症の流行時は、日々変化する状況に迅速に臨機応変に対応することが求められました。当時は終わりが見えず心が折れそうにもなりましたが、上司や同僚にも恵まれ保健所内の課をこえてコロナ業務に取り組むことができたと感じています。

仕事でやりがいを感じる時は、関わった方がその人らしく健康でいられることに、少しでも力になれたかなと感じた時です。対象の方と直接的に関わることが好きですが、関係機関と連絡、調整し、それが結果的に地域の方々の健康につながったと感じる瞬間に、この仕事をしてよかったと感じます。また、医療機関、市町、施設、その他職種をこえて関わっていけることも、保健師の仕事の魅力だと感じています。

我が家には中1長男、小5長女、小1次男がいます。育休後は、時間に追われ、毎日が綱渡り状態でした。仕事も育児も家事も全て中途半端、周囲に迷惑かけっぱなし、子どもにも十分かまっていられないことに自己嫌悪になることも多かったです。

忙しい時に限って保育園から発熱しましたーお迎えお願いします！の呼び出し（えーなんで今なのー）。そしてやっと元気になったと思ったら、別の子が発熱（もーみんなまとめてよー）。子の体を心配する前に親の勝手な都合でこんな考えをしてしまうこともありましたが、夫と半日ずつ休んだり、その時の状況に応じてお互いに業務を調整して休んでいました。当時は、いつ呼び出しがあってもいいように、常に意識して仕事をしていたように思います。

また、職場の理解があった事もとても大きかったです。会議の資料作りで忙しいのに保育園から呼び出しがあり困っていた時、当時の課長さんが「仕事はどれだけでも代われるけど、お母さんの代わりはいないから早くお迎えに行って！あとは何とでもできるから。」と送り出してくれたこと。今でも忘れませんし本当に感謝しています。

小学生以降は、3人とも学童保育を利用しました。お迎えが一番最後にな

ってしまうこともありましたが、寂しくないような工夫をしてくださっていて、先生方にも本当に感謝しています。

限られた時間で子どもと過ごす時間を大切に。成長した姿を日々のエネルギー源に。

仕事で困ったことがあった時は、自身の考えをもった上で早めに上司に相談するようにしています。

また、家では1日数分でも家事の手を止めて子どもの話を聞くことを心がけています。保育園や学校行事、習い事やイベント、部活の試合等には時間のある限り積極的に参加し、子どもたちの成長した姿を見ることが最高の楽しみで、日々のエネルギー源になっています。

改めて、業務の調整や配慮など、働きやすい環境を作って下さる上司や同僚、家事にも育児にも当たり前に参加し、喜怒哀楽を受け止めてくれる夫、そして、寂しい思いもいっぱいさせましたが、親が共働きであることを理解し、多くの方に助けていただき健康に育ってくれている3人の子供たち、周りの方々の理解とサポートに感謝し、これからもメリハリをつけながらがんばっていきたいです。

3 松林 憲吾 観光企画課専門員



— 略 歴 —

H17.4 出納課
H19.4 出納室
H19.7 総務部危機管理監室危機対策課
H22.4 健康福祉部長寿社会課
H27.4 議会事務局総務課
H30.4 観光戦略推進部誘客戦略課専門員
R4.4 観光戦略推進部観光企画課専門員

↑ 育休、復帰

妻の一言から育休取得を決断！ 繁忙期の取得に不安も・・・

観光企画課でデジタルマーケティングに関することなどを担当しています。

石川県はデジタル化が遅れていると言われる中、観光地における人の流れやSNSでの投稿状況を可視化して簡単に分析できるシステムの構築・運用などに携わり、県全体の観光DXの推進に向けて微力ながら貢献できている実感もあり、やりがいをもって取り組んでいます。

4月から県にお越しいただいているデータアナリストと業務を共にすることも多く、日々の業務の中で桁違いのスピード感や柔軟な発想力などに触れ、大きな刺激を得られていることも、なかなか得難い経験でとても有り難いな思いながら日々の業務に取り込んでいます。

長男が誕生した際は、妻が息子連れて3ヶ月ほど輪島の実家に帰り、元保育士である祖母のサポートを受けながらの新生児育児でした。その間、私は週末に顔を見に行くくらいで、特に育休の取得は検討しませんでした。当時のことを妻に聞くと、「出産直後の数ヶ

月が寝不足で朦朧として一番辛かった」と言っていたことが大きな要因となり、次男の妊娠が発覚した時には、自分にもできることがあればサポートしたいと思い、育児休業を取得することに決めました。

育休取得の数ヶ月前から、面談の機会などを通じて上司に意向を伝えたとこころ、「復帰はいつ頃か」とか「引き継ぎは大丈夫か」などといった発言は一切なく、「ぜひ取得してください」というあっさりとした返事であったことがとても印象的で、気持ち的には非常に楽でした。10月からの取得であり、秋の観光イベントや予算要求の時期にも重なって忙しい時期だったので、業務を引き継いだグループ員には申し訳ない気持ちもありましたが、ここはお互い様だと割り切るしかありませんでした。

子どもと過ごす日々は贅沢で貴重な時間

育休中、次男は母乳育児だったので、ミルクづくりなどの出番は思ったほどありませんでしたが、おむつ交換、お風呂、長男の保育園送迎、食事づくりなどをしながら日々を過ごし、終わってみるとあっという間の半年間でした。

妻からは「新生児はあまり外出できないので、日中、自分以外に大人が家にいることで、ちょっとした買い物などにも行けたし心理的な余裕ができた」とも聞いており、精神面の負担軽減にも繋がったのかなと思います。

また、何より、子供の細かな成長の過程を見ながら過ごす日々は、贅沢で貴重な時間だったと思っています。

現在、A勤務ですが、育児時間（特別休暇）を取得して15時45分に退庁し、長男の保育園のお迎えに向かう日々を送っています。勤務時間が短い分、出来るだけ効率的な業務を心掛けつつ、どうしても手が回らない部分が出てきたときは、グループリーダーやグループ員に協力いただいて何とか業務をこなしている状況です。退庁時間が近づくと、課長からも「そろそろ帰る時間じゃない？」などと声を掛けていただき、帰りづらい雰囲気は一切ないので、心理的にも非常に助かっています。

子育てに手がかかるのは、一生のうちで限られた期間だけになるので、今はどちらかというと仕事よりも家庭・子どもに重きを置きながら、日々を過ごしていければと思っています。